



中央区銀座3丁目、ガス灯通りの真ん中に小さなバー白カラス亭がある。山口氏と弟の明氏とニューハーフの登美ちゃんの、三角関係も、余りもつれることもなく無事解決しそうだった。僕の提案を素直に受け止めてくれた、弟の明氏とニューハーフの登美ちゃんが、プロの俳優顔負けのお芝居をしてくれた。それによって、山口氏は渋々ではあるが、身を引く決意を固めたようである。

僕は時計を見た。午前3時半を回っていた。夜明けまで、4時間ほどある。あと何人のお客様が白カラス亭にくるだろうか。僕はお客様のいない店内でカウンターを乾拭きしながら、誰も座らせない一番奥の席に視線を向けた。その時、白カラス亭の自慢の輸入木製扉が静かにゆっくりと開いた。冷たい風の中から懐かしい顔が現れた。

「いらっしゃいませ。・・・あら、どうしたのこんな時間に。金ちゃんじゃないの。」

古くからの知り合いが珍しい時間に入ってきたので、僕は一瞬驚いた。

「お久しぶりです、白カラス亭さん。こんな時間でも銀座に来れば、白カラス亭は未だやっていると蛔いましてね。ちょっと遠かったんですが、タクシー飛ばして来てしまいました。」

「いやあ～、嬉しいですね。こんな時間に遠くからタクシーで来て下さったなんて、感激です。」

僕は、小柄な金ちゃんの白髪頭に目をやった。

「いえいえ、それにちょっと、ご相談したいことがありまして。銀座でバーのマスターをなさっていらっしゃる白カラス亭さんなら、良い答えが見つかるかと思ひましてね・・・。」

金ちゃんは、今から20年程前に、僕が以前勤めていたホテルのバーで知り合った古い友人で、その当時からずっと葬儀屋を営んでいる。

「今日はこんな時間にどうなさったんですか？」

金ちゃんが午前零時を回ってから来たのは初めてだったので、僕は当然の質問をした。

「いやね、今晚ね、上野で通夜だったんだよ。ところが、とんだ騒ぎが起きてね、引き上げるのが、こんな夜中になったんですよ。」

金ちゃんは短い白髪のをしきりに手で撫でて、高そうな鼈甲のフレームの眼鏡を外して、お絞りで顔を拭いた。

「ところで何を飲まれますか、あ、それとお腹空いてませんか？・・・豚肉嫌いじゃなかったですよ。ローストポークの林檎を使ったノルマンディースタイルは如何ですか。それにニンニクたっぷりのカッペリー二のペペロンチーノでも・・・。」

「あ、すまないねえ。本当は腹ペコだったんだ。何だか良く判んないけど、その豚肉のノルマ何とかと、カッペのペペも両方戴くよ。判んないから、お任せしますわ。それとビール下さい。麒麟のビンの奴。」

「はい、直ぐに作りますので、先にビールでも飲んでお待ち下さい。あ、そうそう、おつまみにイベリコ豚の最高級生ハム、ベリョータを召し上げて下さい。ホテルの友人から分けて貰ひましてね。」

「白カラス亭さん、俺の苦手な横文字で言われてもチンプンカンプンだから、何でもいいよ。白

「カラス亭さんが、美味いって思うものを出してくれるかい？」

「はい、承知致しました。でも、本当に嬉しいですね、金ちゃんがこうして、夜中に尋ねてくださるなんて……。」

生ハムをむしゃむしゃと頬張る金ちゃんは、何か浮かない顔をしていた。夜明け前にまたトラブルかと僕は緊張した。

20年来の友人である葬儀屋の遠山金四郎は通常『金ちゃん』の愛称で呼ばれている50代後半の男性である。遠山金四郎といっても例の遠山の金さんとは、縁もゆかりもない家系である。金ちゃんは余程、お腹が空いていたのか、僕の出した、ポークノルマンディーとカップリーニを無言で平らげた。既にビールも3本空けていた。

「ねえねえ、金ちゃん。急がないんだったら、もっとゆっくり食べて、それにゆっくり飲んだ方がいいんじゃないかい？」

僕は何時もと様子が違う金ちゃんにそれとなく注意をした。

「うんにゃ、いいんだ。指図するんじゃないよ。いいから、ビールっ！」

金ちゃんは短い白髪頭をぼりぼり搔きむしった。鼈甲のフレームの眼鏡が鼻からずり落ちそうになった。金ちゃんは、とても優しく、誰にでも気を遣う性格で、愛すべき中年男だったが、たった一つの欠点があった。それはビールを3本以上飲むと、スイッチが入って、ちょっと酒癖が悪くなる場所であった。

「はい、はい。ではご自由にどうぞ。でもう……何かあったんでしょう、こんな時間に僕の処にわざわざタクシーで来るのですから。相談事ってさっき言ったけど、何？」

「何って、何よ。相談だぁ……？ん、忘れちゃったかな。……ふあつ、ふあつ、ふあつ、冗談だよ。高いタクシー代払ったんだからな。忘れる訳はないだろうが。」

金ちゃんは4本目のビールに手を付けた。どうも既に、スイッチは入ってしまったようだ。と、いきなり今度はカウンターに顔を伏せて、おいおいと、声を上げて泣き出した。

「金ちゃん、金ちゃん、ほら、ビールがこぼれる。あ、あ、あ、袖がお皿に付いて、あ～あ、袖を汚してしまった。……金ちゃん、一体何があったんだい。相談があった来たんだらう？」

僕は金ちゃんの汚れた袖口をお絞りで拭きながら、金ちゃんにそっと尋ねた。

「俺ね、俺ね、……白カラスの旦那！俺ね、もう、もう、葬儀屋の商売辞める。」

「おいおい、どうしたってんだい。な、ゆっくり説明してくれないか。」

僕はカウンター越しに金ちゃんの波打つ背中を撫でながら、誰も座らない一番奥の席に視線を投げた。

遠山金四郎こと葬儀屋の金ちゃんの欠点は酒癖が少々悪いことだった。四本目のビールでスイッチが入ってしまった金ちゃんは、言葉遣いが荒くなったと思ったら、今度はカウンターの上に両腕を置いて泣き出してしまった。

「おいおい、金ちゃん、泣くのは結構だけど、泣いている理由を教えてくれないか。この僕でよかったら、相談に乗るよ。」

がばっと、泣き伏していた上体を起こした金ちゃんは、鼈甲縁の眼鏡を外し、袖口で涙を拭き取った。

「ふん、お前に言っても解るもんか。だ、だいたいね、お前なんかは何時も人を酔わせて、金ふんだくってんだろう！」

「金ちゃん、酔わせて金をふんだくってる、は幾らなんでも。お酒を売るのは僕の商売なんだから。」

「ちょ、調子の良いこと言って。お前にね、俺の苦労なんて解りゃしないんだ。」
べらんめえ口調で僕に八つ当たりして、一段落するのが何時もの金ちゃんのパターンだった。

「はいはい、金ちゃんの苦労は僕には解りませんよ。解らないから、どうしたのか教えて下さいって、僕は金ちゃんにお願いしているの。」

「な～んだ、だったら最初から素直に謝りゃいいんだ。素直にな・・・。」
何で、僕が金ちゃんに謝らなければならないのか、何時も不思議に思うが、相手はスイッチの入った酔っ払いなんで、言う通りにした。

「ご免ね、金ちゃん。何も解らなくて。だから、教えてくれないかなあ～。」

「お、素直だねえ～。そうだよ、そうこなくちゃ、教えられないね・・・。ところで、何でこんな葬式みたいな音楽が流れているの？俺が葬儀屋だからって、こんな辛気臭い音楽かけるんじゃないよ。・・・どんちゃか、どんちゃか、派手な音楽にしなさいよっ！」

僕は、静かに聞いていたクラシックのピアノ曲をロックミュージックに変更した。このお店にロックは似合わないので、何時もはかけないが、今は他にお客様がいないので、金ちゃんの指図に従った。

派手なドラムの音とアコースティックギターの響きが耳に障ったが、そのままにした。

「あは～、いいねえ。この音楽は・・・。これ何？うるさい音楽だね。ま、いいか。あのね、俺ね、今夜ってか、昨日ってか、もう午前様だから昨日だな。昨日の通夜で、お客とね、喧嘩してしまったの。」

「ええっ、お客と喧嘩って、葬儀屋さんのお客って、喪主じゃないかい？」

「そうだよ、喪主だよ。喪主の客だよ、それがどうしたってんだ！」

「おいおい、金ちゃん。それを聞いているのは僕の方だ。」

金ちゃんは、ビールをまた一口、ぐびりっ、と飲み干した。それから、またおいおいと泣き出した。

「仏様に申し訳ない事をしてしまったんだ。俺は罰当たりだ・・・。ふえええん。」

葬儀屋が罰当たりなことをしてしまった？一体金ちゃんは何をしてしまったんだろう。

遠山金四郎こと葬儀屋の金ちゃんが、カウンターで泣いたり、わめいたり、と一人で何役もこなしていた。

「金ちゃん、金ちゃん、寝てないで、何が起きたのか教えてよ。」

僕は泣き喚いて、寝てしまった金ちゃんの背中をそっと叩いた。

「う～ん、何だよ。折角、良い気持ちで・・・。むにゃ、むにゃ、むにゃ・・・。」

「悪いね、折角、良い気持ちで寝ているところを起こしてしまって、でも気になるんだよ、一体何があったの？」

「悪いだとお～、だったら、起こすな！」

「はいはい、ではそのまま寝て下さい。」

「何だとお〜、俺の話が聞けないっ、とでも言うのかっ！」

20年来の付き合いだが、金ちゃんの酒癖の悪さには困ったもんだ。

「はいはい、聞きますよ、聞きますよ。何があったんですか？」

「実はなあ〜、実は……三日前ね、出入りしている病院でお二人が、ほとんど同時にお亡くなりになったんだ。でね、それぞれのお家からご葬儀のご依頼を受けたのよ。両方とも昨夜中にお通夜をすることになったの。」

「うんうん、それで、どうしたの。お仕事貰えて、良かったじゃない。」

金ちゃんはグラスの中に残ったビールを一気に飲み干した。

「う、温いねえ、このビール。おい、白カラス亭は何時から温いビールを客に出すようになったんだっ！」

「おいおい、人聞き悪いこと言わないでよ。それは金ちゃんの飲み残しで、ずっと置いてあったビールだよ。」

僕は仕方なく冷たいビールをもう一本冷蔵庫から取り出した。

「金ちゃん、これ以上は飲んじゃ駄目だよ。もうだいぶ酔っ払っているから。」

「何だとお、何時から酔っ払ってるだとお〜。おい、酔っ払いを捕まえて、酔っ払い呼ばわりするな、お前はぼったくり、バーのオヤジだな。」

「まあまあ、それで、その続きはどうなったんだよ。」

「うん？……通夜の用意を同時に二箇所です……。」

金ちゃんがまた、俯いて鼈甲縁の眼鏡を外した。涙が溢れてきた。金ちゃんが袖口で目頭を拭いた。ロック音楽がどうも場に相応しくなかった。

「あのねえ、白カラス亭さん。間違えてしまったの。一軒がキリスト教式で一軒が仏式だったの。両方の家もてんやわんやで、お通夜の用意が整った時に、喪主が気付いたんだ、ご遺体が違うし、お式のセットも違うって。」

「ええっ！どうして、そんな間違えが起きたの？」

僕は啞然として、泣き崩れる金ちゃんの背中を擦った。

たった一人のお客様、葬儀屋の金ちゃんが、カウンターで泣いたり、喚いたり、眠ったりと大変な状況を呈していた。

「あのさ、両家ともにチェーン店の葬祭場で通夜も告別式も行うことになったんだよ。そもそも、それを良く注意しなかった、俺の、俺の、俺の……むにや、むにや、むにや……。」

金ちゃんはビール四本でスイッチが入って、酒癖が悪くなり、五本で眠りだす愛すべき中年男である。鼈甲縁の眼鏡が顔からずり落ちそうになった。

「金ちゃん、金ちゃん、眼鏡が落ちるよ。……で、それで、それで、どうしたの！」

僕は、金ちゃんを揺り動かした。眼鏡がカウンターにことりっ、と音を立てて落っこちた。ロックの音が、どっかんっ、と鳴り響いた。

「う、う、う〜ん、何だっつえ！何がどうしたんだあ……。」

「おいおい、それは僕が聞いているんだよ。」

「そうかあ、じゃあ教えてやるよ。・・・その、その両家の葬祭場が、一方が『御霊の社会館』で片方が『御霊の杜賓館』だった。」

「ああ、どちらも有名な葬祭場の大手チェーンだね。」

「そう、その大手チェーンが悪いんだよ、でも俺が悪い・・・。」

金ちゃんは再び、ビールに手を伸ばした。僕はグラスを既に片付けてあったので、酔っている金ちゃんは、眼鏡を外した酔眼でキョロキョロとグラスを探していたが、諦めたらしい。

「一方が台東区の『御霊の社会館』でキリスト教式で、もう片方が墨田区の『御霊の杜賓館』で仏式だったんだよ。俺がね、俺が、どういう訳か、メモをうちの会社のスタッフに間違えて渡してしまったんだよ・・・。というか、書き間違えた。」

「そうか、そういう訳で間違えたんだ。確かに同じ病院で同じ日、同じ時刻にお亡くなりになって、また同じ日、同じ時刻に、同じ大手チェーンの葬祭場で通夜かあ！それに台東区と墨田区は隣の区だしねえ。これは間違えるよね。」

僕は金ちゃんに同情した。まるで紛らわしい。金ちゃんじゃなくても、間違えそうだ。

「俺もね、俺も、間違えちゃいけないと思って、メモ用紙の色まで変えていたんだ、でも、ということか、書き込む内容を全く反対にしてしまった・・・。」

しかし、通夜は滞りなく執り行われたらしい。どのようにして、挽回したんだろうか、僕は不思議に思った。

遠山金四郎こと葬儀屋の金ちゃんが、とんだ間違いをしてしまった。仏式とキリスト教式の設営を間違えてしまった上に、ご遺体まで間違えてしまったという。

「ちょ、ちょっと、待ってよ。金ちゃん。つまり、そっくり入れ違ったんだろう？」

僕は頭をよぎった疑問を金ちゃんにぶっつけた。有線放送のロックが一段と激しく鳴り響いた。

「さっきから、そういってるだろうが！ういっ、・・・おい、カラスの脳味噌は小さくて理解できないのか！」

泣いたり、怒鳴ったり、忙しい中年男である。鼈甲縁の眼鏡はカウンターに落っこちたままである。

「じゃあ、金ちゃん、解決方法は割りと簡単だったでしょう。」

僕は自分で考えた解決方法が多分正解であろうと思った。

「そ、そうだよ、そうだよ。う～ん、ういっ。・・・ご遺体だけが入れ違っていたんなら、そりゃあ、もう大変だったさ。ご遺体を取り違えついでに、設営まで取り違えてしまったよ、うはっ、はっ、はっ・・・。」

金ちゃんは、酔っ払いながらカウンター越しに僕の手を握った。

「キリスト様もお釈迦様も、この遠山金四郎にお情けを下さったんだ。」

また金ちゃんが、泣き出した。

「そうか、やっぱり。ご遺体にとって、ご葬儀の方式は間違ってたんだ。つまりは、ご葬儀会場を、お互いに取り替えれば解決したんだ。ご導師も交換すればよかった。そうだろう、金ちゃん！」

「う、ういっ～、軽い脳味噌の割りには、するどいね。・・・ご親族やご参列の方々の会場を交換するだけで済んだ・・・。ご葬儀の規模もほぼ同じ、それに同じ大手チェーンの葬祭場な

んで、ご葬儀費用もほぼ同じ金額だったんだ。」

金ちゃんは目頭をこすりながら僕に答えた。現実に戻されて、金ちゃんの酔いも少し醒めて来たようだ。

「そうか、大手チェーンの葬祭場だから、シャトルバスの用意はあるよね。会場変更を知らなくて、来られた参列者をお互いにピストン輸送したんだね。」

僕は金ちゃんが答える前に金ちゃんに問いただした。

「そ、そ、その通り。我社の社員全員と葬祭場の係りが、総出で対応したんだ。幸運だったのは、台東区と墨田区でそんなに離れてなかったんで、30分の遅れで開式できたんだ。でもね、両家の喪主と葬祭場からは散々に怒られた……。何年葬儀屋やってんだっ、て。」

金ちゃんが下を見てうなだれた。

「結果オーライだよ、金ちゃん。何とかなくてよかったじゃない。もし、ご遺体だけが入れ違って、気付くのが遅かったら、それこそ大変な騒ぎになってたよ。感謝、感謝。」

僕は金ちゃんを慰めるように、金ちゃんの手を握り返した。

「でもね、白カラス亭さん、全ての費用は俺の持ち出しになった。とんだ赤字になっちゃったんだ。年末になって社員にボーナス出せなくなったよ。ふえええん〜！」

金ちゃんは、またまた、泣き出してしまった。泣き上戸に怒り上戸で、困ったもんだ。

「ま、他にお客様はいないから、好きなだけ此処で泣いていいよ。」

「うにゃ、へっ？他に客は居ないだとお〜。そっちの端に女がいるわいなあ、っと。」

金ちゃんの指差した方向は、カウンターが一番隅の誰も座らない席だった。

「ええっ、ど、ど、どこに……。誰も居ないよ！」

僕は驚いて、舌を噛みそうになった。

中央区銀座3丁目、ガス灯通りの真ん中に小さなバー白カラス亭がある。午前3時半を回って、入って来た、遠山金四郎こと葬儀屋の金ちゃんが通夜の失敗話を始めた。ビール4本でスイッチが入ってしまう金ちゃんは、もう既に5本のビールを飲んでいた。酔った勢いで、喚いたり、泣いたり、眠ったりと、酒癖のあまりよろしくない金ちゃんに散々に振り回されたが、何とか話を一通り聞くことができた。喪主から怒られようが、総斎場からは罵られようが、兎に角、通夜をなんとか仕切ることができたんだから、金ちゃんにとっては結果オーライだった。そりゃあ、予期せぬ出費は痛かっただろうが、この程度で済んだ事は幸いだった。

ところが、話が一段落したところで、金ちゃんがとんでもない事を言った。

「客は誰も居ないだとお！俺はねえ、酔っ払ってなんかいないよ、ほら一番隅の席に、女が一人で座っているじゃないか。」

僕が、金ちゃん以外に誰も客はいないと言った事に、金ちゃんは反発しながら一番奥の、僕が何時もは誰も座らせない席を指さした。

ところが、話が一段落したところで、金ちゃんがとんでもない事を言った。

「客は誰も居ないだとお！俺はねえ、酔っ払ってなんかいないよ、ほら一番隅の席に、女が一人で座っているじゃないか。」

僕が、金ちゃん以外に誰も客はいないと言った事に、金ちゃんは反発しながら一番奥の、僕が何時もは誰も座らせない席を指さした。

「金ちゃん、金ちゃんは、酔っ払ってんだよ。店の中には誰もいないよ。タクシー呼んであげるから、もう帰りなよ。」

「ういっ、・・・なんだとお。・・・おい、白カラス亭は何時から、何時からね、客を追い出すようになったんだあ。ういっ、う～、気持ち悪くなって来た。家に帰るから電話して呉れ。」
金ちゃんは再び、カウンターに顔を伏せて、鼻を掻き出した。今喋っていたのに、もう眠っていた。

「金ちゃん、金ちゃん、いくらなんでも午前4時に電話をしたら、ママちゃんに、僕が怒られるよ。」

「いいの、いいの、今夜は全員徹夜してるから。ママちゃんに、怒られるだとお！何時も、何時もね、息子の嫁に気兼ねなんかしてられるかつ、てんだ。むにゃ、むにゃ、むにゃ・・・・・・・・。」

金ちゃんは器用に寝ながら、片手をひらひらさせて、否定の意思表示をした。

「おい、白カラス亭、・・・その隅の女は、あんたの、あんたの、死んだ女房じゃないの？・・・むにゃ、むにゃ、むにゃ・・・・・・・・。」

金ちゃんはカウンターで寝ながら呟いていた。涎が袖口を濡らしていた。

「えっ、ぼ、ぼ、僕の女房だって！・・・あいつは3年前に死んだよ。金ちゃん、金ちゃん、金ちゃんは、まさか・・・・・・・・見えるのかい？」

そういえば、さっきから、有線で流れていた激しいロックミュージックがまた静かなクラシックのピアノ曲に換わっていた。僕は、有線のダイヤルを触った記憶がないのに、不思議だった。その時、白カラス亭の電話がピロピロピロと鳴り出し

酔っ払ってカウンターの上で眠ってしまった、葬儀屋の金ちゃんこと遠山金四郎がとんでもないことを寝る前に言った。誰も居ない筈の店内の隅の席に女性が座っていると言うのだ。

「おい、白カラス亭、・・・その隅の女は、あんたの、あんたの、死んだ女房じゃないの？・・・むにゃ、むにゃ、むにゃ・・・・・・・・。」

そういえば、何時の間にか有線放送のロックがクラシックに換わっていた。確かに3年前に死んだ、僕の女房のヨウコはクラシックピアノの曲が大好きだった。僕は視線をそっと一番隅っこの席に投げた。誰もいない・・・・・・・・。そんな時、白カラス亭の電話がチョロチョロと可愛い音を立てて鳴った。僕はどきっ、として電話をとった。

「あ、あのう～、銀座の白カラス亭さんですか？」

若い女性の声だった。

「ええ、銀座のバー白カラス亭ですが・・・・・・・・。」

「ああ、よかった。うちですね、うちのじっちゃん。あ、いえいえ、うちの父がお邪魔してませんでしょうか？」

電話は遠山金四郎こと葬儀屋の金ちゃんの息子の嫁であるママちゃんからだった。

「ああ、ママちゃんですね。ええ、ええ、金ちゃんは此処で鼻水垂らしながら眠っています。ちょっと今夜は飲みたかったようですね。」

「ああ、よかった。いえね、銀座のバーに行くって、一人でタクシーに乗り込んでしまったので、心配だったのです。でも多分白カラス亭さんだろうって、うちのパパちゃん、あ、うちの主人と話をしていたんです。・・・今夜は色々あったもんで、じっちゃんも、あ、父も酔いたかったんだと思います。」

ママちゃんの、感じのいい、ちょっと慌てた声が電話口から聞えた。

「今、お店には他にお客様もいませんから、もう少し寝かせてあげてください。これは僕からのお願いです。眼が覚めましたら、タクシーを呼んで乗せて差し上げますから。」

「え、お邪魔じゃないですかあ？・・・父も白カラス亭さんに会いたかったんだと思います。古い友人にでも、今夜のことは話しをしたかたんだと思います。本当にすみませんが、よろしくお願ひします。眼が覚めましたらタクシーで帰して下さい。お願ひします。」

ママちゃんが何度も何度も電話口で頭を下げている光景が目には浮かんた。こんな、気持ちの良い嫁さんが居て、金ちゃんも幸せ者だと僕は思った。僕には家で待っている女房も、子供も、孫もない。金ちゃんが羨ましかった。

その時金ちゃんがカウンターの上で顔を上げた。

「ごめんね、アナタ。寂しい想いをさせてるわね・・・、ごめんね・・・。」

ど、ど、どういう事だ、金ちゃんの顔が・・・！

金ちゃんの顔が、3年前に亡くなったヨウコの顔だった。そのヨウコの顔が僕に謝った。

「あ、あ、あ、ヨ、ヨ、ヨ、ヨウコ・・・。」

僕は言葉が出なかった。脚と手が震えた。どっと涙が僕の頬を伝って落ちた。

午前4時を回って、カウンターの上に両腕を投げ出し、涎を垂らしながら眠りこけていた、葬儀屋の金ちゃんこと、遠山金四郎の顔が3年前に亡くなった、ヨウコの顔になった。そして、ヨウコが申し訳なさそうに僕に謝るのだった。

「ごめんね、アナタ。寂しい想いをさせてるわね・・・、ごめんね・・・。」

僕は声にならなかった。僕の頬を伝ってどっと涙がこぼれた。有線放送がショパンの幻想即興曲の流麗な響きを流し始めた。

「あ、あ、あ、ヨ、ヨ、ヨ、ヨウコ・・・。」

金ちゃんの中年オヤジの顔が、死んだヨウコになって、横を向いて喋っていた。奇妙と言えば奇妙だし、恐ろしいと言えば恐ろしかった。しかし、3年前に亡くなった最愛の妻の顔に違いなかった。

「何時も、何時も、私の為にあの隅の席を空けておいて下さって有難う。・・・私と貴方が3年前に二人で始めた、この白カラス亭を貴方は守って・・・むにゃ、むにゃ、おい、白カラス亭！・・・ういっ、ビールをもっと出せ！」

「な、なんだ・・・？」

おやおや、顔がヨウコのままで、今度は金ちゃんが途中からしゃしゃり出てきた。

「貴方はご存知なかったかも知れませんが、私は何時も、毎晩、この隅の席で貴方の姿を見て・・・おい、白カラス亭、タクシーを呼べ！う、う、ういっ、お～気持ち悪う・・・。」最初は、ヨウコが喋っているが、途中から金ちゃんが喋っている。どうも混線しているらしい。霊界からの通信が上手く行かないようだ。あららら、今度は金ちゃんの元の顔に戻ってしまった。あ～あ、涎で袖口がびしょびしょになっている。

「ねえ、貴方、貴方を何時も見つめているのも、もう、もう、これで終わり・・・。」鼈甲縁の鼻眼鏡の金ちゃんの顔をしたヨウコが喋っている。どうも気持ちが悪い。どう見ても中年オヤジのオカマに口説かれているようだ。

「貴方、貴方、ごめんなさい・・・。何時までもこの世にいることはで・き・な・い・・・。」

金ちゃんの顔でそう言われても、何とも微妙に気持ち悪い。金ちゃんの顔のままだと、どうもしっくり応えられない。

「ヨウコ、お願いだから、この人、金ちゃんの顔をヨウコの顔にしてくれないか。これじゃ、金ちゃんを抱きしめてしまいそうだよ。」

「ごめんなさい、貴方。この寝ている方のお体を借りて、貴方にお伝えしようと思っていましたが、この方が簡単にお体をお貸し下さらないの。拒否していらっしゃるわ。」金ちゃんがオネエ言葉でしゃべると、オカマの葬儀屋になってしまう。こんな問答が何時まで続くんだ。僕は折角ヨウコと喋れたのに、困惑していた。

師走の夜は長い。午前4時を回って、たった一人のお客の葬儀屋の金ちゃんこと、遠山金四郎が、カウンターで酔いつぶれて眠ってしまった。ところが、3年前に死んだ、妻のヨウコが金ちゃんに憑依して突然現れた。

ところが、様子がどうもおかしい。銀座界限は因縁の強い場所なんで、霊界からの通信霊波が混線模様になってしまった。それと、葬儀屋の金ちゃんも仕事柄、霊に対する免疫が強く、憑依されながら無意識に抵抗しているらしい。金ちゃんの格好でヨウコが喋るもんだから、まるでオカマの葬儀屋がオネエ言葉を使っているようなもんだ。

「何時も貴方を隅のお席から見ていました。貴方、ごめんなさい・・・本当の独りぼっちにさせてしまったわ。・・・明け方にお店のシャッターを閉めて、家に帰る途中、コンビニでお弁当を買う貴方の背中に、私は何度も涙を流しました。寂しかったでしょうね。・・・でも、でも、でも、もう私は此処にはいられないのです。あちらの世界に行かなくてはなりません。貴方を見ていられるのも、今夜限りなのです。」

カウンターで酔いつぶれて眠っている金ちゃんの、鼈甲縁の眼鏡がずり落ちていた。眠って閉じている金ちゃんの両眼から透き通った涙が、じわ～っと溢れ出た。ショパンのピアノ協奏曲が一段と激しく聞えた。

「き、き、金ちゃん、じゃなかった、ヨウコ。じゃあ、も、も、もう二度と会えないのかい？」僕はカウンターの上に延びた、金ちゃんの両腕をそっと掴んだ。

「何だとお！・・・俺に・・・俺に・・・もう二度と会いたくないってか、うい！・・・ムニヤ、ムニヤ、ムニヤ・・・。」

今度は金ちゃん本人が喋ったが、内容が混線して被っている。

「ヨウコ、ヨウコ、お願いだから、もう少し話をしてくれないか！そ、それと、金ちゃんに、ちょっとの間だけ邪魔しないで貰えないかな？」

「なにい、ヨウコだと？・・・お前の死んだ女房か？・・・うちの嫁はママちゃんだ。」

また、金ちゃんが被っていた。僕は大いに迷った。もし、金ちゃんを叩き起こして、現実に戻ってしまったら、それこそ、憑依していたヨウコはあちらの世界に旅立って、二度と僕はヨウコと話ができなくなってしまう。

その時、白カラス亭の電話がまた、チロチロチロと切なく鳴った。

僕は有線放送のボリュームを小さく絞って、受話器を取った。

「はい、銀座のバー白カラス亭でございます。」

僕は何時もの営業用の声で答えた。

「貴方ね、ああ・・・何時もの貴方の明るい声が聞えたわ。そうそう、有線放送のボリュームを下げないで下さいな。」

「えっ、ヨ、ヨ、ヨウコなのか・・・？」

「ええ、そうですね。実はそこで眠っていらっしゃる、貴方のお友達の金さんに憑依したのですが、私を快く受け入れて下さらないので、困っておりましたら、丁度貴方へお電話が入ったので、私が電話線に入り込ませて戴きましたの。」

「え、じゃあ、この電話は誰かが僕に掛けて来た訳？」

僕は驚いて、受話器を耳から離して、じっと送話口を見つめた。

「ええ、そこの貴方のお友達の家族の方がお電話してきましたわ。若い女性の声だったわ。」

「げっ、そうか。嫁のママちゃんが金ちゃんのこと心配で電話してきたんだ。」

僕は声に出さずに、心の中で思った。

「あら、電話はこの眠っている金ちゃんって方の、息子さんのお嫁さんだったのね。多分、お話中だと思っているわ。」

「ヨ、ヨウコ。君は僕の心の中まで読めるのかい？」

「勿論よ。だって私は霊ですもの。意思の無い物体に作用したり、人間や動物に憑依したり、人間の意思を読み取ること、くらいはできますわ。でも、でも、神様から怒られました。何時までも、未練がましく浮遊霊として、貴方につきまとうなっ、て神様のご命令ですの。」

「ヨウコ、君が望むなら、何時までもこのお店の隅の席に居てくれても、いいんだよ。僕は、君がそこから僕を見ていてくれると思うと、ちっとも寂しくなんかないよ。」

有線放送のクラシックピアノが一段と大きく聞えた。カウンターの上で酔い潰れている金ちゃんが煩そうに、顔の向きを変えた。片方の頬にカウンターで付いた赤い痕が残っていた。金ちゃんももぞもぞと動き出した。

「おいおい、金ちゃん。未だ起きるなよ！」

僕は再度心の中で祈った。

「ご免なさい、貴方。神様に無理を言って、もう3年も天国に行かないで、地上におりましたが、今日が最後なんです。神様との約束は今日の日の出の時刻なんです。日の出とともに私は天国に旅立ち、ヨウコとして二度とこの地上には戻れません。貴方との今生での縁しも終わりなんです。ご免なさいね、貴方……。」

「ヨウコ、お願いだ。もう一度だけ君の頬や、君の眉や、君の唇に、この手で触れてみたい。もう一度だけ君の肩を抱いてみたい。もう一度だけ君の顔を見せてくれ！」

「ご免なさい、貴方。そのような無理を言わないで下さい。私は物体として存在しておりませんのよ。」

「ああ～、なんてこった。ヨウコに会えたのに、触れることもできないなんて！」
僕は切ない想いを声にだして嘆いた。二筋の涙が僕の頬を伝って首筋に達した。溢れる涙で視界が歪んだ。

優しくあったヨウコ、何時も僕の事だけを考えてくれていたヨウコ。とっても仲のよかった僕等夫婦だったのに、3年前突然に襲った悲しい別れ。それ以来僕は、誰にもヨウコのことは言わず、ヨウコのことにも触れず、二人で開店したこの白カラス亭を守って来た。

「ヨウコ、何とか言ってくれ、ヨウコっ！」
「……………」

ツーツーと受話器からは無常な音声が聞えるだけだった。
白カラス亭の壁掛け時計は午前5時を指していた。冬至の日の出は、東京では午前7時半頃の筈だ。ヨウコが天国に帰ってしまうまで、あと2時間半しかない。僕は焦った。
電話回線で話をしていたヨウコの声が突如として消えた。ま、相手は霊の存在だから、消えても別に不思議ではないのだが、僕はヨウコの顔をもう一度だけ、どうしても見たいと思った。
ツーツーと電話回線の切れた無情な音だけが流れる受話器を僕は手に持ったまま、じっと見つめていた。カウンターで酔いつぶれている、葬儀屋の金ちゃんこと、遠山金四郎が何時目を覚めますか、僕は、はらはら、ドキドキしていた。もし、金ちゃんが今、起きたら、事の成り行きが理解できずに、てんやわんやの騒ぎになることが、必至だった。

しかし、無情にも僕は受話器を手にしたまま、急に尿意を催した。中年になって、尿意を意識したが最後、我慢はそうそう長く続かない。前立腺肥大症の僕は経験で知っている。まさか、自分のお店でお漏らしをする訳にはいかない。

「なんで、こんな時に……まったくう！」
僕は、自分で自分の間の悪さに悪態をついて、未練たらたらに受話器を電話機に戻してトイレに入った。トイレの中でも有線放送が聴けるようになっているので、僕は、クラシックのピアノ演奏を聴きながら、幸せな放尿を続けた。最初目を閉じて、放尿の幸せをじっくりと味わっていた僕は、なにげなく、横の大きな鏡を見て、引っくり返るほど驚いた。驚いたついでに、トイレの中に小便を撒き散らし、自分のズボンや足までびしょびしょにしてしまった。

「ひ、ひ、ひ、ひ、ひえええっ！……ヨ、ヨ、ヨ、ヨウコ。ど、ど、ど、どうしてそんな中にいるんだっ、き、き、き、君は何時からそんなに下品な、覗き趣味になったんだ！」
僕は小便でびしょびしょの指で鏡を触った。鏡に指の痕が付いた。

「あららら、汚いわねえ。ちゃんと洗って下さいな。ご免なさい、脅かすつもりわ……だって

このお店の中で、鏡は此処しかないのですもの。貴方が私の顔が見たいって、何度も何度も、念じたではありませんか。」

「そりゃ、そうだけど。いきなり出たら、誰だって驚くではないか。それも、小便をしている最中だ。あ～、嬉しいやら、悲しいやら、あ～あ、小便撒き散らしてしまった。掃除が大変だ。」鏡の中のヨウコが、優しそうな目で僕を見ていた。その時だった。トイレのドアがドンドン、ドンドン、と激しくノックされた。お店の中に金ちゃん以外にお客様がいないので、僕はトイレの鍵を掛けずに入っていた。

「お～い、白カラス亭。便所にいるんだらう？・・・ういっ、う～。気持ち悪い。吐きそうだ。あ、ああ～吐いちゃう。入るぞっ！」

一番恐れていた状況になった。金ちゃんが起きてきた。それも吐きそうだトイレに入ってきた。ど、ど、どうしよう。床も壁も僕のズボンもびしょびしょだ。鏡の中にはヨウコも居る。あ～絶体絶命だと僕は思った。

午前5時を回って、日の出までもう2時間少々しか僕には残されていなかった。3年前に亡くなったヨウコが最後のお別れに、酔っ払った葬儀屋の金ちゃんこと遠山金四郎に憑依したが、どうも潜在意識下でヨウコは金ちゃんに拒否されたらしく、今度はトイレの鏡に出現した。放尿中だった僕は大いに驚いて、トイレ中にオシッコを振りまいてしまった挙句に、手も足もオシッコでびしょびしょになってしまった。ところが間の悪いことに、金ちゃんが吐き気を催して、鍵の掛かっているオシッコだらけのトイレに飛び込んで来てしまった。さあ大変などたばたが始まってしまった。

「な、な、なんだっ・・・トイレに飛び込んで来るなよ、金ちゃん！」

トイレに飛び込んだ金ちゃんは僕をトイレの奥に突き飛ばした。

「う、う、うっ～・・・吐く、吐く、吐く・・・ど、ど、どいてえ～・・・！」

ゲロゲロゲロっと、金ちゃんはトイレに飛び込むなり便器に顔を突っ込んで吐いてしまった。狭いトイレの奥に押し込まれてしまった僕は、自分の一部を慌てて仕舞い込み、ズボンのジッパーで挟んでしまった。オシッコで濡れた指が災いしてしまった。

「ぎえええ、ぎゃあああ～あいたたたた・・・っ！」

「ゲロゲロゲロゲロ・・・うううう～っ！」

トイレの中は壮絶な状態になった。ジッパーで自分を挟み込んだ僕の悲鳴と便器に顔を突っ込んで、ゲロを吐く金ちゃんの不協和音がトイレ中に響き渡った。僕は余りの痛さに涙を流し、気が遠くなりそうだった。金ちゃんはゲロで喉を詰まらせたらしく、今度はひ～ひ～と苦しそうな息をしていた。ただ一人というか、ただヨウコだけが鏡の中で恨めしそうな顔で僕等二人をじっと眺めていた。っとヨウコの姿が鏡から消えた。

僕は焦った。ヨウコがこのまま、どこかに行ってしまったら、この夜明けを最後にもう一生ヨウコの顔を見ることができなくなってしまう。自分の姿が情けなかった。足も手もオシッコまみれで、ジッパーに己の息子を挟み込んで、おまけに金ちゃんまでと一緒にトイレに入っていた。あ～もう、どうしたらいいんだか判らなくなってしまった。何時もの気取ったシルバーグレイの行ける中年親父、白カラス亭マスターも散々だった。

もう余り時間が残されていないというのに、葬儀屋の金ちゃん、こと遠山金四郎と僕は狭いトイレの中で、身動きできない状態になった。

金ちゃんは便器に顔を突っ込んで、ゲロゲロゲロゲロ、ヒーヒーヒーと唸ったり、白目をむいたり大変な状況だった。僕は僕で、己の分身をジッパーで挟んで、出血大サービスで、痛いやら動けないやら、トイレの隅で何とか脚だけは自由が利いた。しかし、ズボンも手も足も、びしょびしょに、オシッコで濡れていて気持ちも悪い、何とかしなくてはと焦った。

「ヨウコ、どこに消えてしまったんだ……。もう直ぐ夜明けだってのに。」

僕は鏡を覗き込んだが、ヨウコは鏡の中には居なかった。その時、今迄便器を抱いて唸っていた金ちゃんが、ひょこっと顔を上げた。鼈甲縁の眼鏡はカウンターの上に置いて来たらしく、眼鏡は掛けていなかった。それにしても、吐いた物が便器の中の水で跳ね返って、顔中べちょべちょだった。金ちゃんの膝は僕が床に振りまいたオシッコで、重く濡れていた。

「あ〜ん、ど、どうしたんだ。あんた何でそんな隅っこに……。」

「き、金ちゃん、気が付いたのか！」

「俺か？う〜ん、吐いたら気分が良くなった。でも、何で俺は、あんたと一緒にトイレにいるんだ……。」

金ちゃんは状況をやっぱり飲み込めていないらしい。自分の顔も手も膝もびしょびしょなのに、未だ気付いていないようだ。言われて金ちゃんは自分の顔を手で拭った。

「うわわ、顔も手も、ぐちょぐちょに汚れているわ。ズボンだって濡れているっ！」

「そ、そ、それは、僕がトイレに入っていたら、金ちゃんが、後から飛び込んで、僕を隅っこに突き飛ばしたんだよ。……な、金ちゃん、それより、顔と手を洗面台で洗ったほうがいい。それと僕を此処から出してくれないかい！」

「あれれれ、おい、白カラス亭さん、なんで……。あんた自分の息子を出しっぱなしにして……。れれれれ、もしかしてジッパーに挟んで、あ、あ、あ、それに、ジッパーに食い込んで、血が出ている。うわ〜痛そう、手当てしなきゃ駄目だ。俺が手当てしてやるから、薬あったっけ……。なに、薬は無いのかあ。そうかあ、うん、焼酎があったな。あれでいい。……ところでトイレの中、水撒きでもしたのか？」

金ちゃんは少し正気を取り戻したようだ。洗面台で手と顔を先に洗った金ちゃんがトイレから出た。僕はやっとの思いで、脚を動かし、そろそろとエビのように身体を曲げてトイレから出た。何とも恥ずかしい格好だった。わが身を挟み込んだジッパーは上まで上がり切ってなく、相変わらず結構出血していた。こんな惨めな姿をヨウコはどこから見つめているのだろうか？僕は時間の経過が気になった。もう午前6時近いことは確かだった。トイレの中で聞えていた筈の有線放送が止まっていた。ヨウコが何かの合図を送っているのだろうか？僕は焦った。

ヨウコが鏡の中から、何処かに消えてしまった。有線放送のダイヤルを幾ら回しても、どのチャンネルも、うんともすんとも応えては呉れなかった。未だヨウコはこの白カラス亭の中に居る筈だと僕は思った。

エビのように身体をくの字に曲げた僕は、葬儀屋の金ちゃんこと、遠山金四郎の危なかしい応急手当を受ける羽目になった。

「おい、白カラス亭、どこに焼酎あるんだ……。何だかわかんねえよ。」

葬儀屋の金ちゃんは始めて入ったカウンターの中で、130種類からの洋酒の瓶に驚いていた。カウンターの外から、客として見ていると判らないのだろうが、カウンターの中から、ずらっと並ぶ酒瓶の棚を見て圧倒されたい。

「あ、いててて・・・金ちゃん、も、も、もう何でもいいから、持って来て呉れないか。一応どれも酒なんで、アルコールは入っているから大丈夫。」

「そうかい、う～ん何だか、どれもこれも美味そうな酒だなあ・・・。」

「た、た、頼むよ。後でたっぷり吐くまで飲ませてあげるから、何とかしてくれないか。」

「うんにゃ、吐くのは、もう結構だね。・・・うんこれが美味そうだな。これに決めよう。」

金ちゃんが瓶棚から何かを1本持ち出して、カウンターの外でうずくまる僕に近づいた。おもむろに金ちゃんが、僕の『お○○○ん』の先っぽをそっと摘んで、酒を口に含んだ。

「お、お、お、おおお～。う、う、美味しい。何ともこの、ふくよかな香り。う～ん、もう一杯。・・・それにしても、お粗末な『お○○○ん』だね。なんとも、こりゃ、縮まって可愛いもんだ。しかし、まあしっかりとチャックが皮を噛んでるね。」

「お、お、お粗末は余計だっ。金ちゃん、金ちゃん、頼むよ。お願いだから、酒を飲んでないで、手当てしてくれよ。」

僕は金ちゃんに哀願した。金ちゃんが、じろっと僕を見つめた。

「うん、判ったから。判ったから、ちょっと待て！」

「えっ、えっ、えっ、未だ待つのかい？」

「黙って、怪我人は黙ってなさい。え～と、眼鏡を捜しているんだよ。俺の、眼鏡、眼鏡、眼鏡ちゃん。うい、グビッ、グビッ・・・。」

「眼鏡はカウンターの上にあるよ。あ、あ、あ、また飲んでいる。手当てが先だろう！」

鼈甲縁の眼鏡を掛けた金ちゃんが再度おもむろに、僕の『お○○○ん』を摘み上げ、口に含んだ酒を、霧状に僕の『お○○○ん』に降り掛けた。同時に金ちゃんはチャックを一気に引き下げた。

「ぎゃあああああ、ぎいえええええ、ぶわわわわ、・・・☆●◇*#&%# \$ φ！！」

僕は自分でも訳の判らない言葉を発した。

頭の天辺から足先に激痛と電気が流れた。再び出血したが、金ちゃんがタオルで抑えた。もう一度、口に含んだ酒をタオルの上から拭きかけた。芳醇で、強い香りが辺り一面に漂った。今度は余り痛みを感じなかった。僕は何気なく、金ちゃんが手に持っている酒瓶を見て驚いた。

「き、き、き、金ちゃん。そ、そ、そ、その酒・・・。」

「ああ、応急手当完了。どうだい、慣れたもんだろう。・・・え？・・・何、この酒？」

「き、金ちゃん。そ、そ、その酒は1本、仕入れ値で、さ、さ、30万円のラ・フォンテーヌ100年って、超高級コニャックだよおおおお。」

「超高級コニャックだ?? こりゃあ酒だぜ。おい、白カラス亭、痛みで頭が変になったんじゃないか。」

「ち、ち、ち、違うっ、超高級ブランデーの事だ。」

「何っ、ブランデー。ほほう、ほほう、ブランデーとはこんなにも美味であったか。」

「何を、気取ってるんだい。あ、いててて。金ちゃん悪いけど、トイレの横のドアを開けて、僕の小さなオフィスがある。そこに着替えのズボンと下着があるんで取って来てくれないか？ ああ、そうそう、そのドア。悪いねえ。」

僕は、ジッパーの悲劇から解放され、救急車を呼ぶ恥ずかしさから、どうにか免れることができた。病院に担ぎ込まれたら、それこそ看護婦さんの間で、ジッパーに息子を挟んで、血だらけの馬鹿オヤジにされてしまうところだった。

ところで、夜明け迄もう時間は30分も無くなっていた。ヨウコはどこに行ったのだろうか。ヨウコに一目だけでも会いたかった。

幾ら師走の日の出は遅いと言っても、午前7時30分には太陽は昇ってくる。もう1時間もなかった。ヨウコは何処に消えてしまったのだろう。葬儀屋の金ちゃんこと遠山金四郎の手粗い素人治療で、高級ブランドを患部に吹き付けられた僕は、オシッコで汚れたズボンと下着を着替え、カウンターの中に戻った。ジッパーに挟み込んだ『お○○ん』はパンツの中でジーンと脈打っていた。相変わらず有線放送は黙り込んだままだった。

カウンターに戻った金ちゃんは、ご褒美に超高級ブランド『ラ・フォンテーヌ100年』にありついていた。

「う、う、う、……うめえ！。この高級コンニャクは堪らない香りだねえ、白カラス亭さんよっ。また、何時でも怪我しなよ、俺がこの高級コンニャクを吹きかけてあげるからな。」金ちゃんが相好を崩した。が、しきりに鼈甲縁の眼鏡を着けたり、外したり、矯めつ眇めつ眼鏡を検査し出した。

「コンニャクじゃないよ、コニャックだよ。……おや、どうしたの、金ちゃん。眼鏡に何か付いてるのかい？」

「いやあ～それがね、テレビも点いてないのに、何か女の顔が映ってんだよ。眼鏡に何かが反射してんのかねえ……？」

金ちゃんがそう言いながら、再び眼鏡を自分の顔に掛けた。

「あ、あ、あ、ヨ、ヨ、ヨウコっ！」

僕は金ちゃん的眼鏡の中に映ったヨウコを見た。金ちゃん的眼鏡の両方のレンズにヨウコが居た。

「貴方。……もう行かなくてはならないのですが、実はこの方の眼鏡に入り込んで出られなくなりました。このまま出られなかったら、神様との約束を破り未来永劫、私の魂は成仏できずに冥界を彷徨うことになってしまいます。貴方、お願い、助けて……助けて……助けて。」

眼鏡を掛けた金ちゃんの口を借りて、ヨウコが喋った。どうやら、金ちゃんの意識を封じ込めることはできたようだが、今度はヨウコ自身が脱出できない状態になっただけらしい。

「ど、ど、どうしたら……いいんだ。僕にも、僕にも、どうしたらいいか判んないよ。金ちゃんを起こそうか？あ、いやいや、起こしたら却って大変だ、でも、どうしたら……！」

僕は全身に冷や汗を掻いていた。ヨウコが成仏できずに冥界を彷徨うことにだけは、なって欲しくなかった。『お○○ん』がドキドキと脈打っていた。不思議と痛みは消えていた。

葬儀屋の金ちゃんこと遠山金四郎の鼈甲縁眼鏡の中に閉じ込められてしまった、ヨウコの魂は夜

明け返に抜け出ることができるのだろうか。もし、抜け出ることができなかつたら、神様との約束を破った罪で、未来永劫、ヨウコの魂は幽冥界と現実界の間を彷徨うことになってしまう。金ちゃんの意識はヨウコによって眠られされているので、金ちゃんが、この場に登場していないのは、おおいに助かった。もし、金ちゃんが起きていたら、しっちゃかめっちゃか、にされるところだ。

僕は時計を見た。6時50分を指していた。あと30分でどうやってヨウコを助けることができるのだろうか。僕は焦った。焦って、うっかり、金ちゃんが高級コニャックを飲んでいたグラスを倒して割ってしまった。おまけに、グラスを慌てて掴んで、指まで切ってしまった。踏んだり蹴ったりだった。『お○○ん』はジッパーで挟んで血だらけになるし、今度は指まで詰めるところだった。バーのマスターにあるまじき失態に、自分が腹立たしかった。が、しかしその時、僕は閃いた。

「指まで、詰める！・・・指を詰める、指を詰める、ああ、あ、あ、そ、そ、それだっ！」
僕は震える指で、指の治療もそこそこに、貰った名刺を束ねたファイルをめくった。

「あ、あ、あ、あった。これだ。これだ。松木幸四郎だ。え〜と、え〜と、下谷だったな。寺の住職の息子で坊さんの修行中の松木幸四郎。あの男だったら、お経を唱えることはできるはずだ。」（注：銀座のバー白カラス亭2話に登場）

僕は、急いで電話のボタンをプッシュした。無情な呼び出し音が、数回鳴った。僕は心の中で祈った。

「電話に出てくれ、出てくれ、出てくれ！修行中の坊主だったらもう起床しているだろう！」

「は〜い、もしもし、どちら様ですか？」

「あ、あ、あ、あ、ま、ま、松木幸四郎さん？」

「え、ええ・・・どちら様で？」

「夕べお会いした、銀座のバーの白、白、白カラス亭です。」

「ああ、白カラス亭さん。どうしたんですか、朝早くから。」

事故で指を二本失った、坊主見習い中である松木幸四郎の間延びた声が受話器の向こうから聞えて来た。

「す、す、すみませんが、今直ぐに銀座の白カラス亭に飛んできて下さい。急、急、急用なんです。タクシー代はお支払いしますんで。夜が明けちゃうんで・・・！」

「ど、ど、どうしたんですか、そんなに慌てて。そりゃあ僕は坊主ですから、朝の修行でもう起きてましたんで。でも飛んで来いと言われても、カラスじゃないので、飛べないですよ、は、は、は、は、は・・・。」

「そ、そ、そんな悠長な冗談を言ってる場合じゃないんです。と、兎に角、お経本と蠟燭と線香を用意して。あ、数珠も忘れないで下さい。兎に角、夜が明ける前に、急いで来てっ！」

僕は受話器に向かって怒鳴っていた。カウンターの上で眠りこける金ちゃんの鼈甲縁の眼鏡の中でヨウコの顔が悲しそうに見えた。

再びカウンターで眠りこける、葬儀屋の金ちゃんこと、遠山金四郎の鼈甲縁の眼鏡の中に閉じ込められてしまった、ヨウコが悲しそうな顔で僕を見つめていた。両方のレンズにヨウコがいるので、ヨウコが二乗で悲しそうな顔をしている。僕は白カラス亭の壁掛け時計を見た。午前7時を5分回っていた。夜明けまでもう、何分も無い。僕は腕時計も見た。当たり前だが壁掛け時計と同じ時刻を指していた。正直僕は、焦りに焦っていた。二つのレンズの中のヨウコが泣いているように見えた。ジッパーに挟んだ『お○○ん』の痛みや割れたグラスで切った指の痛みどころではなかった。僕は両手で髪の毛を掻き毟った。

その時、白カラス亭自慢の大きな木製扉が勢い良く開いて、190cmの超巨体の坊主頭が入ってきた。黒い革ジャンに白のスエットに雪駄かと思いきや、なんと僧侶の正装である、袈裟まで掛けていた。眉毛を縦断する顔の傷や薬指や小指が無い手を見たら、どうしても、その筋の方としか思えないのだが、今は殊勝な顔をしていた。下谷のお寺の住職の息子で、見習い坊主なんだが、とても立派な僧侶に見えたから不思議だった。

「お待たせしました～。タクシーをすっ飛ばして参上しました。えーと、で、お経をあげて欲しい方とは……。あ、この寝てる方で？大丈夫です、お任せ下さい。今朝の私は真剣でございます。」

見習い坊主の松木幸四郎がとぼけた声を出した。僕はカウンター越しに客席の方を見た。やっぱり、乳母車の中にあのトイブードルを乗せていた。犬は大人しく中で寝ているようだ。

「あ、あ、あ、待ってたよ。待ってたよ。兎に角急ぐんだ、始めて。ね、始めて下さい。頼むっ！」

僕は怒鳴るように、両手を合掌して松木幸四郎に言った。

「あ、違う、違う、違う。その寝ている男じゃないんだって。その男の眼鏡、眼鏡。眼鏡を外して。」

松木幸四郎が寝ている金ちゃんを起こそうとしたので、僕は慌てて止めた。

「え、眼鏡が……。眼鏡がどうしたんで？眼鏡を外せって、外してどうするんで？」

下谷のお寺の息子、松木幸四郎は事情が飲み込めずに、金ちゃんの顔から鼈甲縁の眼鏡を外した。外した眼鏡のレンズを、手にして暫く不思議そうに眺めていたが、急に顔色が変わった。

「ぎ、ぎ、ぎ、ぎえええっえ！な、な、な、なんと、なんと、なんと、めがめ、めがめ、いや、眼鏡の中で、じよ、じよ、女性が……。こっちを見つめているううううう～。」

松木幸四郎が鼈甲縁の眼鏡をカウンターに放り出し、トイブードルが眠っている乳母車に抱きついた。巨体の割りに意外と臆病な男だ。

「あ、あ、あ、レ、レ、レ、レンズが割れたらど、ど、どうするのっ！」

僕は冷や汗を流しながら、眼鏡をカウンターから救い上げた。

「あのね、松木幸四郎さん、落ち着いて。落ち着いて聞いて欲しいんだが、眼鏡の中の女性は3年前に死んだ僕の奥さん、ヨウコの魂なんだ。いい、いい、良く聞いて。あと十数分で夜が明けてしまう。夜が明ける前に、ヨウコの魂をこの眼鏡から救い出してあげないと、神様のお怒りで二度と成仏できなくなってしまうんだ。お、お、お願いだから、今直ぐお経をあげて……。頼む、頼む、お経を……。」

僕は両手を合わせて、何度も何度も松木幸四郎に頭を下げた。

「わ、わ、わかり……。しました。できるかどうか、判りませんが、やってみましょう。」

カウンターの上にお皿を置いて、蠟燭を立て、線香を3本、新品のスポンジに挿して火を点した。軟らかい煙が3条くねくねとゆっくり天井に昇って消えた。その前に鼈甲縁の眼鏡を置き、松木幸四郎が数珠を手に掛け、お経をあげ始めた。般若心経だか観音経だか知らないが、お経の内容は、ちんぷんかんぷんだったが、熱のこもった松木幸四郎の朗々たる音吐が狭い店内に響き渡った。松木幸四郎のお経が始まると、乳母車の中で寝ていた、トイブードルが立ち上がって、不思議そうな顔をして身を乗り出して、大欠伸をした。

カウンターにそっと置かれた、金ちゃんこと葬儀屋の遠山金四郎の鼈甲縁の眼鏡のレンズの中でヨウコが泣いているように見えた。その筋の方も真っ青になる、巨体と風貌を持った、住職の息子の松木幸四郎が指二本の無い手で数珠を擦り合わせて、読経を続けていた。

僕は白カラス亭の壁掛け時計に目を遣った。針は7時15分を指している。あ～もう夜が明ける

。どうすれば、ヨウコは助かるのだろう。僕は心の中で神様に祈った。

「神様、お願いします。何とかヨウコを助けて下さい。私は何時も不信心で罪障ばかり積んでおりますが、これからは、信心に勤めます。どうか、どうか、ヨウコをそちらの世界にお連れください。ヨウコの魂が未来永劫、この娑婆世界で浮遊しないように、何とかお助け下さい。」

僕も、松木幸四郎の読経に合わせ、瞑目し両手を合わせた。心臓の鼓動が激しくなり、耳に鼓動の音が聞こえるような気がして、僕は片目をそっと開けた。店内は暖房で幾ら暖かいとはいえ、師走である。しかし必死で読経を続ける松木幸四郎の額には玉の汗が光って、首筋に流れていた。

僕はいても立ってもいられなくなった。お店に配達されてくる新聞を広げ、日の出の時刻を確かめた。ページをめくる指が震えた。ガラスの破片で切った指からの出血は止まっていた。

「あ、ここだ、ここだ。え〜と、東京、東京の、今日の日の出、日の出・・・え、え、えぎえ〜そ、そ、そんな。・・・東京の今日の日の出は、午前6時48分！も、も、もう夜が明けちゃってるんだ。」

僕は自分で夜明けは、てっきり午前7時20分前後だとばかり、思い込んでいたのだ。この銀座界隈はビルが建て込んでおり、なかなか朝日が差し込まないので、完全に勘違いしていたのだ。どうすればいいんだっ！ヨウコがレンズの中で泣きそうな顔をしていたのが、やっと判った。夜明けの時間が迫っていたんだ。

僕は自分の勘違いに頭を抱え込んでカウンターの中に座り込みそうになった。

ヨウコの魂は金ちゃんこと遠山金四郎の鼈甲縁眼鏡のレンズに閉じ込められてしまった。神様と今朝の夜明けまでに霊界に戻る約束だったヨウコは、僕に助けを求めた。『お〇〇〇ん』と指を怪我した僕は、痛みを堪えて、考えを巡らせ、その筋の方顔負けの超巨体の坊主見習い、松木幸四郎を呼び出しお経をあげて貰った。しかし、お経の効果はまるでなく、ヨウコはレンズの中で泣いているようだった。何故なら、僕が東京の夜明けを午前7時20分頃と、頭から思い込んでいたからだった。朝刊を広げて僕は目の玉が飛び出すくらいに驚いた。なんと今朝の東京の日の出は午前6時48分だった。そうだった、弓なりの日本列島の中で、東京は夜明けの時間が全国でも早い場所だった。僕は白カラス亭の壁掛け時計に視線を向けた。絶望的とも思える午前7時15分を指していた。汗を流しながら松木幸四郎の読経は続いていた。その時、寝ていた筈の金ちゃんが、いきなりくしゃみをして、目を覚ました。

「うわわわあ〜、あ〜、良く寝たね。お、な、な、な、な、何だ、何だ、何だ。此処でも葬式が始まるんか・・・。誰だい、この馬鹿でかい坊主は。まるでプロレスラー坊主だな。眉毛を断ち切る向こう傷、でんでんでんでん・・・それに、指も二本欠けている。こりゃ、まさに極道坊主だな。あれえ、何で俺の眼鏡がそこにあるの？」

金ちゃんが一人で喚いて、大きな欠伸をしながら、伸びをした。

「き、き、き、金ちゃん。お願いだから、お願い。だから、ちょっと黙ってって。ね、ね、ね、後でちゃんと説明するから。あ、あ、あ、あ、その眼鏡は触らないで。そのまま置いておいて。」

僕は慌てて、金ちゃんを制した。

「う、う、う、何だか良く訳が判らんけど、ま、白カラス亭の頼みだから、うん、俺ちょっと外

の空気を吸ってくるわ。」

金ちゃんが立ち上がり、再び伸びをしながらドアに向かって歩いた。

「あれええ～、乳母車に犬がいる。お～い、この犬どうしたんだ。」

金ちゃんが大きな声で喋りながら、白カラス亭自慢の木製輸入扉を開けた。外の冷気が一気に中に吹き込んで来た。外が明るくなっていた。

「おい、金ちゃん。寒いからドアを閉めてくれよっ！」

僕はいらいらしながら、読経の邪魔にならないように小さく怒鳴った。

「いいんだよ、ちょっとは、外の空気と交換した方が・・・。」

金ちゃんが言い返した。その時だった、松木幸四郎のトイ・プードルが見事な3段ジャンプを見せた。乳母車のフレームを踏み台にして、カウンターの上に飛び移り、更にジャンプしてカウンターに飛び乗った。そして、カウンターの上の金ちゃんの鼈甲縁の眼鏡の蔓を啜えて、再び飛び降りた。源義経の八艘飛び顔負けの大ジャンプだった。床に降りたトイ・プードルは眼鏡を啜えて、金ちゃんの横をすり抜け、ドアから外に走り出て行った。僕も、松木幸四郎も、金ちゃんも全員が

「あっ！」と言っただけだった。

僕等は呆然とトイ・プードルが走り出すのを見ていた。

午前7時15分を壁掛け時計の針が指していた。金ちゃんこと遠山金四郎の鼈甲縁眼鏡のレンズでヨウコが泣いているようだった。くしゃみをして目覚めた、金ちゃんが外の空気を吸いに、白カラス亭のドアを開けた瞬間だった。坊主見習いの松木幸四郎のトイ・プードルが八艘飛びならぬ、乳母車・椅子・カウンター・フロアーの4段飛びを見せ、金ちゃんの鼈甲縁眼鏡の蔓を啜えて、外に走りだした。誰も止めようがなかった。それくらいに素早かった。

「あ、あ、眼鏡、眼鏡、眼鏡～！」

僕が連呼した。声がかすれていた。

「俺の、お、俺の犬が。犬が飛び出したあ！」

びっくりして言葉を発した金ちゃんが、自分の足元を脱兎の如く走りぬけたトイ・プードルを口をあぐり開けて見送った。

「あ、あ、あ、あ、まってええええっ！つ、つ、つ、つかまえてええええっ！」

読経を慌てて中断した、松木幸四郎がドアに突進した。驚いたのは金ちゃんだった。仁王のような顔と巨体の坊主が金ちゃんに襲い掛かったように見えた。

「ひ、ひ、ひ、ひえええっ・・・。」

金ちゃんはドアを開けたまま、両腕で頭を抱えてその場にしゃがみこんだ。190cmを超すプロレスラー並みの巨体が、意外と鋭い動きで、金ちゃんを飛び越えてガス灯通りを走り出した。僕もカウンターから飛び出た。金ちゃんが顔を上げた瞬間、ドアから駆け出た僕に顔面を蹴られて、金ちゃんは鼻血を出して失神してしまった。金ちゃんを助けなければと思いつつ、僕はトイ・プードルと松木幸四郎を追いかけた。トイ・プードルの脚は早かった。ガス灯通りと交差するマロニエ通り方向に眼鏡を啜えたまま、一目散に駆けていった。その後を巨体の松木幸四郎が袈裟をなびかせ、ドスドスドスとまるで恐竜のような走りを見せた。

「まてええええ、アサヒっ、まてえええアサヒっ、まてえ、まつんだあっ！あ、あ、あ、車が、車が、あ、あ、あ、あぶ、あぶ、危ないっ……。」

すっかり明るくなったガス灯通りを疾駆しながら、松木幸四郎がトイ・プードルの名前を呼んだ。ダンプカーに街宣マイクを付けたような巨体が走った。

「ああ、トイ・プードルの名前って、アサヒって言うんだ。……キリン？サッポロ？サントリー？」

僕は非常に焦っている筈なのに、追っかけながら、なんでビールの名前なんだと思った。職業病だと自分で変に感心した。僕は腕時計を見た。7時20分のところに長針が影を付けていた。

「ヨ、ヨ、ヨウコ……ヨウコ、ヨウコ。」

僕は心の中で叫んでいた。

中央区銀座3丁目、ガス灯通りの真ん中に小さなバー白カラス亭がある。金ちゃんこと遠山金四郎の鼈甲縁眼鏡を啜えて、トイ・プードルが脱兎の如くガス灯通りを走り出した。トイ・プードルの飼い主である超巨体の見習い坊主、松木幸四郎が。それを追っかけてダンプカーのように走った。更にそれから遅れて、僕が走り出たが、バーの入り口にしゃがみ込んだ、金ちゃんを蹴って失神させてしまった。金ちゃんのことを気になったが、眼鏡のレンズに閉じ込められたヨウコの魂の方が心配だった。

「アサヒ～、アサヒ～、まてえ～、まてえ～、まてくれえ～。」

街宣カー並みに大きな声で松木幸四郎が袈裟をなびかせ走っていた。

アサヒと言う名前のトイ・プードルはマロニエ通りを器用に直角に曲がった。その先は銀座中央通りだ。幾ら早朝で車が少ないといっても、中央通りにはそこそこの数の車が走っているはずだ。息切れしている松木幸四郎に追いついた僕も、マロニエ通りを曲がった。

「居た、居た、居たっ！アサヒ～、動くなよ。そこを動くなあ～っ！」

松木幸四郎がかすれた声で怒鳴った。巨体であるが故に、持久力はないようだ。僕もトイ・プードルのアサヒが、カルチェのお店の前にちょこんと座っているのを見つけた。しかし、眼鏡を啜えていなかった。

「眼鏡、眼鏡、眼鏡……。ああああ、あんなところに、眼鏡が、在るううううう！」

何とアサヒが啜えていた鼈甲縁の眼鏡が中央通りのど真ん中に落ちていた。アサヒが中央通りの真ん中まで運んで置いてきたらしい。僕と松木幸四郎がカルチェの前で立ち止まり、マロニエ通りの信号が変わるのを待った。僕は眼鏡を取るタイミングを計って、車の流れを注視した。松木幸四郎はアサヒを捕まえに横断歩道を渡った。

その時だった、ビルの谷間からマロニエ通りに太陽の光が一直線に差し込んだ。師走の朝日が低く延びて、中央通りの真ん中に落ちている眼鏡にも太陽の光が当たった。キラキラとレンズが朝日に反射した。と、その時、レンズから何かが、霧のように立ち昇った。霧がヨウコの姿になった。ヨウコが僕に手を振った。ヨウコが笑った。それは、ほんの一秒の何分の一かの短い時間だったかも知れない。朝日に導かれるようにヨウコの魂は、静かに神様に手を引かれて昇って行った。僕はヨウコが、この瞬間に成仏したのを感じていた。松木幸四郎は、捕まえたトイ・プードルのアサヒに頬刷りをしていた。

「そうか、そうだったんだ。最初から神様はアサヒに眼鏡を運ばせる役目を与えていたんだ。ア

サヒはビールでは無く、昇る太陽の朝日のことだったんだ。」

僕は、神様の粋な計らいに感謝した。

「ヨウコ、良かったね。ヨウコ色々楽しい思い出を有難う。有難う、ヨウコ・・・。」

ところで、眼鏡を拾いに行く必要が無くなった。何故なら、走って来たトラックが見事に、粉々に轢いて呉れたからだ。

「あ、金ちゃん。大変だ、金ちゃんが失神したままだ！」

僕は、急いで白カラス亭に戻った。

超巨体で坊主見習いの松木幸四郎の飼い犬、トイ・プードルのアサヒがヨウコの成仏を助けてくれた。ヨウコは昇る冬至の朝日に照らされ、神様の元に笑顔で旅立って行った。僕はビルに囲まれた銀座の狭い青空を暫く見続けていた。

「ヨウコ、有難う・・・僕が今度そっちへ行ったら、また仲の良い夫婦になろうね。」

僕は心の中で天上に旅立ったヨウコにそっと言った。僕の頬を撫でるように、師走の銀座中央通りに一陣の爽やかな冷風が吹きぬけた。きっとヨウコが僕にOKの返事をして呉れたんだと思った。カルチェのブティックの前で、松木幸四郎は抱き上げたトイ・プードルのアサヒに、飽きることの無い頬刷りをしていた。たまに通る歩行者が不思議な光景を見るように、通り過ぎて行く。

「あ、いけないっ。金ちゃんが・・・失神したままだ！」

僕は慌ててガス灯通りの白カラス亭に走って戻った。白カラス亭の自慢の木製ドアが開け放してあった。失神している筈の金ちゃんが見えなかった。僕の脳裏に不安がよぎった。まさか・・・金ちゃん、失神して記憶喪失になって、夢遊病者のように銀座を徘徊してる・・・。僕は白カラス亭に飛び込んだ。

「金ちゃん、金ちゃん、いるか、金ちゃん・・・？」

僕は怒鳴りながら店内に入った。

「あ、お帰なさい。お邪魔してました。」

明るい笑顔が小顔からこぼれた。チャーミングな20代から30代らしき女性が白カラス亭の中から僕に微笑み掛けた。

「あ、あのう～、あ、貴女は・・・？」

「あ、あら、ご免なさい。勝手に入ってしまいましたわ。わたし、遠山金四郎の娘です。正確には息子の嫁ですが。父の帰りが遅いし、夜も明けてしまったんで、タクシーで迎えに来たんです。余程昨夜の通夜の手違いが応えたんだらうって、主人とも話していたんですの。」

笑い顔からこぼれる、白く綺麗な歯並びが印象的な美人だった。

「あ、あ、な～んだ、金ちゃんの家、ママちゃんでしたか。何時もね、金ちゃんが貴女のことを、ママちゃんって呼んでるんです。・・・ああ、良かった。で、金ちゃんは、どこに。」

僕は店内に金ちゃんがないので、心配になった。

ヨウコの魂もトイ・プードルのアサヒのお陰で無事に成仏できた。しかし、葬儀屋の金ちゃんこと遠山金四郎の姿が見えない。どうしてしまったのだろうか、鼻血を出して失神して、消えてしまった。娘のままちゃんも金ちゃんを心配して迎えに来ていた。

「金ちゃんを見かけませんでしたか？」

僕が蹴りを入れて失神させたとは言えずに、ママちゃんにさり気無く聞いた。

「ええ、私がタクシーでお店の前で降りた時、お店のドアが開け放しでしたが、父の姿も、どなたもお店にはいらっしゃいませんでしたわ。物騒だと思って私が中でお店番をしておりました。」

30代には見えない、可愛い顔がにこにこ笑っていた。この天真爛漫な、ママちゃんは父親が面倒に巻き込まれたり、事故にあったりとは、まるで考えが及ばないらしい。世の中がこんな女性ばかりだと本当に平和なのだがと、僕は感心して彼女を見つめ直した。その時だった、外から金ちゃんが大きな声で僕を呼んだ。

「お〜い、白カラス亭、どこに行ってたんだ。誰もいないから、この先のスターバックスでコーヒー買ってきたら、そこの角でこのレスラー坊主に出っくわしたよ。袈裟を着て犬を抱いて、まるで坊主らしくないな。俺はね、ちょっとこの坊主に文句があるのよ、そうだろう、俺を蹴飛ばして、鼻血を出させておいて、どっかに消えてしまったんだ。文句の一つも言いたくなるだろうってもんだよな。」

どうも、金ちゃんは失神から醒めて、ティッシュを鼻の穴に詰めて、コーヒーを買いに行っていたらしい。しかし、蹴っ飛ばしたのが僕ではなくて、巨体の坊主見習いの松木幸四郎だと信じているようだった。

松木幸四郎はトイ・プードルが無事だったので、それだけで、金ちゃんの文句に対しては何も弁解しなかった。僕も敢えて訂正しなかった。僕は、松木幸四郎に読経代とタクシー代を払って、お礼を言った。金ちゃんの鼈甲縁眼鏡がトラックに轢かれたしまった顛末を説明すると話が長くなり、また混乱をきたすので、鼈甲縁眼鏡は僕が壊してしまったので、後日弁償することにして、お詫びを言って、金ちゃんをママちゃんに連れて帰って貰った。

僕は、独りになって、お店の片づけを始めた。長かった一晩が終わった。この一晩で色々なことがあった。片付けの手を休め、僕はヨウコが何時も座って僕を見つめていてくれた一番奥の隅の席に、今はいないヨウコの姿を想像した。その時、止まっていた筈の有線放送から、尾崎豊の「I Love You」が急に流れてきた。そうか、ヨウコの大好きな曲だ。きっとヨウコは天国で尾崎豊のコンサートを聞いているのかも知れないと、僕は曲が終わるまでじっと聞いていた。

「有難うヨウコ、そしてさようなら、ヨウコ」僕の頬を涙が伝った。